

『椿姫』におけるヒロイン像

——『マノン・レスコー』との対比を通して——

南 光 未 緒

1. はじめに

アレクサンドル・デュマ・フィス (Alexandre Dumas fils) (1824-1895) は、『三銃士』 (*Les Trois Mousquetaires*)¹⁾ や『モンテ・クリスト伯』 (*Le Comte de Monte-Cristo*)²⁾ などの著書で知られるアレクサンドル・デュマ (1802-1870) の長男である。デュマ・フィスは正式名ではなく、本名は父と同じく、アレクサンドル・デュマである。しかし、大作家として既に名前を馳せていた父と区別をするために息子を意味する「フィス」を加えて呼ばれてきた。母は、カトリーヌ＝ロール・ラベール (Catherine-Laure Labey) という女性だが、父との間に婚姻関係はなかったため、デュマ・フィスは私生児として生まれる。1831年に父から正式に息子として認知され、そのまま父に引き取られる。そこでの裕福な生活とは裏腹に、離れ離れになった母親のことや私生児という周囲からの偏見に苦悩する日々を送る。こうした家庭環境が故にデュマ・フィスは、写実的で人生の慈悲を繊細に描写する特徴を持つ作家となった。また、ロマン主義を代表する大作家の父とは正反対とも言える保守的なブルジョワ道徳

1) アレクサンドル・デュマが1844年に書いた、青年ダルタニャンと三銃士の冒険歴史小説。『三銃士 (上) / (下)』、生島遼一訳、岩波文庫、1970年参照。

2) 同著者が1844年から46年にかけて出版した壮大な復讐が描かれた長編小説。日本では『巖窟王』という名で知られている。『モンテ・クリスト伯 1～7』、山内義雄訳、岩波文庫、1956年参照。

を体现し、自然主義の作品を数多く残していることから、自身が幼少期から抱えていた苦悩や、憧れながらも遊蕩生活に明け暮れていた偉大な父に対する反抗心を作品に反映させている³⁾。

『椿姫』(*La Dame aux Camélias*) は、1848年にデュマ・フィスが自身の実体験を基にして書いた最初の長編恋愛小説である。アベ・プレヴォ(Abbé Prévost) (1697-1763) の『シュヴァリエ・デ・グリユーとマノン・レスコーの物語』(*Histoire du Chevalier Des Grieux et de Manon Lescaut*)⁴⁾ (以下『マノン・レスコー』)、プロスペル・メリメ (Prosper Mérimée) (1803-1870) の『カルメン』(*Carmen*)⁵⁾ と同様にファム・ファタル (*femme fatale*)⁶⁾ を描写した小説としても周知されている⁷⁾。『椿姫』は出版されてから瞬く間に脚光を浴び、舞台での上演が期待された。しかし、高級娼婦を意味するクルチザンヌ (*courtisane*) が主人公の物語のため当時のブルジョワ道徳に反する恐れがあった。そのため、直ぐに舞台化されることはなく、第二帝政が始まった1852年に自らの脚本により同作を初めて舞台上で上演するに至る。そして、小説と同様に舞台も大成功を収め、19世紀を代表する戯曲となった。また、上記のようにこの物語はデュマ・フィスの実体験を基にして描かれており、20歳の頃に経験したマリ・デ

3) 『娼婦の肖像』、村田京子著、新評論、2006年、p.59-60参照。

4) 1731年に聖職者であるアベ・プレヴォによって執筆された、自らの半生を色濃く反映した小説集『ある貴族の回想』(*Mémoires et Aventures d'un homme de qualité qui s'est retiré du monde*) の最終巻に収められた長編小説。『マノン・レスコー』、アベ・プレヴォ著、野崎歓訳、光文社文庫、2017年参照。以下、『マノン・レスコー』からの引用は同書からとし、作品名とページ数のみ記す。

5) 1845年に歴史学者であり作家であるプロスペル・メリメによって執筆された、全4章からなる中編小説。『カルメン』、プロスペル・メリメ著、杉捷夫訳、岩波文庫、2007年参照。

6) フランス語で「宿命の女」を意味し、男を破滅に導く運命の女とされる。『悪女入門 ファム・ファタル恋愛論』、鹿島茂著、講談社、2003年参照。

7) 同書参照。

ュプレシス (Marie Duplessis) との恋愛がそのモデルである。彼女は複数の高貴なパトロンを持ち、後に「椿姫」という愛称で呼ばれたクルチザンヌである。デュマ・フィスは、父の庇護により若い頃から出入りしていた社交界で彼女と知り合い、恋に落ちてしまう。一方で、『椿姫』の冒頭では「この話が事実であることあらかじめ断っておきたい⁸⁾」と記されているが、これはあくまでもデュマ・フィスによって虚構化された小説である。中でも事実とは大きく異なる部分として、「マルグリット・ゴーチエ (Marguerite Gautier) の美化」がある⁹⁾。マリをモデルに生み出されたマルグリットも殆どの部分でマリと一致しているが、物語の後半ではマリとは別人とも言えるマルグリットが描写されている。つまり、デュマ・フィスは、マルグリットに物語の「ヒロイン」としての役割や自身の理想を課したと考えられる。したがって、七月王政期のクルチザンヌの実態やその時代背景を踏まえ、デュマ・フィスが思い描いた「ヒロイン像」を明確にすることは考察に値すると考える。

デュマ・フィスが、『椿姫』を執筆するにあたり、プレヴォの『マノン・レスコー』から大きな影響を受けていることは明らかである。例として、物語の冒頭において、名高いクルチザンヌであったマルグリットの死後に彼女の自宅で行われた競売で、語り手である「私」が彼女の遺品『マノン・レスコー』に不思議と執着して買い取る描写がある。それがきっかけとなって、この本の送り主であるアルマン・デュヴァル (Armand Duval) という青年と「私」は出会うこととなり、彼の口からマルグリットとの恋愛が語られるのである。物語の冒頭から『マノン・レスコー』が印象深く描写されていることから、言わば「『マノン・レスコー』が物語の触媒の役割¹⁰⁾」となっている。また、物語の要所には度々

8) 『椿姫』、デュマ・フィス著、永田千奈訳、光文社文庫、2018年、p.7。以下、『椿姫』からの引用は同書からとし、作品名とページ数のみ記す。

9) 『椿姫』、p.441-444参照。

10) 『仏文研究』、『椿姫』におけるクルチザンヌ像：マルグリットゴーチエとマノ

『マノン・レスコー』が言及されていること、作品全体を通して様々な類似点が存在することから、作品においても、読者の見解においても影響力がある重要な役割を担っていると言える。したがって、マルグリットの人物像及びデュマ・フィスが思い描く「ヒロイン像」を明確にするためには、『マノン・レスコー』との対比を通して、両作品の関係を考察すべきではないだろうか。

本稿では、『椿姫』における「ヒロイン像」の考察を進める。考察の過程としては、まず『マノン・レスコー』との対比を通して類似点を探った上、『椿姫』の作中に記述されている『マノン・レスコー』の役割や相違点について考える。それに加えて、『椿姫』の舞台である七月王政期のブルジョワ社会の時代背景を踏まえつつ、物語後半におけるマルグリットの自己犠牲の真意についても探っていく。その上で、実際のデュマ・フィスとマリとの恋愛における事実関係にも触れながら、理想として生み出されたマルグリットの「ヒロイン像」について明確にしていきたい。

2. 『椿姫』と『マノン・レスコー』の類似点

序論で述べたように『椿姫』において『マノン・レスコー』は、物語の随所で幾度となく記述されているため、存在感が強く、密接に関係していることが見て取れる。現にデュマ・フィスは、マリの死後すぐにパリに戻って「サンジェルマンにこもりきりで『マノン・レスコー』を再読し、彼の思い出をそこに結びつけ、「白馬亭」で一ヶ月かけて『椿姫』を書き上げた¹¹⁾」とされている。このことから、彼が『椿姫』を執筆するにあたり、『マノン・レスコー』から大きな影響を受けていることは明確であり、両作品が類似するのも無理はないだろう。そこで、両作品にお

ン・レスコー」、村田京子著、京都大学フランス語学フランス文学研究室、34号、2003年、p.16.

11) 『学苑』、「デュマ・フィス作『椿姫』のヒロイン像」、加賀山孝子著、昭和女子大学光葉会、1991年、619号、p.22.

ける数多くの共通点から見出される、デュマ・フィスの意図はどのようなものだろうか。本章では、まず両作品の共通点を取り上げ、彼が『マノン・レスコー』に拘った真意について考察する。

最も大きな共通点は、以下の4点である。

① 語りの構造

両作品においては、物語の枠として最初と最後に登場する「私」という語り手の話の間に、それぞれの青年主人公であるアルマン、デ・グリュの一人称の回想の語りが展開されている。つまり、両作品共に「二重の語りの構造¹²⁾」という形式をとっている。この形式は「元来、波乱的なファム・ファタルと主人公の男性の人生の絡まりを冷静に整理し、秩序立てるのに効果的な方法¹³⁾」であり、このような物語の典型的な構造である。このように、両作品は共に類似した語りの形式を用いている。

② 物語の筋書き（前半部分）

まず物語の冒頭では、どちらの作品も、ヒロインの哀れな姿に語り手である「私」の注意が引かれるところから物語が始まる。そして、青年主人公が愛する人をこの世から失ったことで病に倒れ、心身のショックから立ち直ることができずに傷心している。そんな彼に「私」が与えた無償の行為によるお礼として物語の回想が始まる。回想の物語においては、幸せの絶頂でのヒロインによる裏切り行為がある。しかしそれは青年主人公とより幸せに過ごすための行為であり、それを知った彼はヒロインに「絶対的服従」「永遠の愛」を誓う。そん

12) 『娼婦の肖像』、村田京子著、新評論、2006年、p.63。

13) 『言語と文化』、「歴史的、社会的、文学的ファム・ファタル像の変遷：読者志向性・作者・『マノン・レスコー』」、日中鎮朗著、法政大学言語・文化センター、2017年、14巻、p.26。

な主人公は贅沢な暮らしの維持のために賭博（『マノン・レスコー』の場合は加えて詐欺）を行い、母親の遺産にまで手を付けようとする。そのため、両者の父親の介入が余儀なくされ幸福が壊される。両作品では筋書きにおいても類似する部分が見受けられる。

③ 恋愛模様

どちらの作品においても、良家の子息であり純粋で世間知らずな慎ましい青年が、同じ年頃でありながら知識や経験が豊富な女性、つまりはクルチザンヌに一目惚れするという恋愛のシチュエーションである。ここで「魅惑する、魔法をかける（enchanter）」という語が用いられているところでも類似している¹⁴⁾。さらに、青年主人公はヒロインをクルチザンヌではなく1人の女性として見ており、体よりも心の繋がりを優先している一途で強い情熱を抱いている。そして最終的にはその愛情に感銘を受けたヒロインが彼に「絶対的服従」「永遠の愛」を誓う。この恋愛の構図においても類似している。

④ マルグリットとマノンの性質

両者は共に、容姿端麗で男性に及ばず魅惑的な力を兼ね備えているクルチザンヌである。一方で、両者には本質的な部分でより特徴的な共通点がある。それは、矛盾的な二面性という特質を持ち合わせていることである。まずマノンを特徴づける要素は、正直さ、無邪気さ、天真爛漫さである。デ・グリュによると、「天真爛漫」な口調で「私の気持ちを害するような事柄まで打ち明ける正直であけっぴろげ」な彼女は、「軽率で無分別ではあるけれど、まっすぐに誠実な女」として「悪気もなく罪を犯している¹⁵⁾」。マノンには、「軽率で無分別」という不道德な性質と、「天真爛漫さ」「まっとうで誠実」と

14) 『娼婦の肖像』、村田京子著、新評論、2006年参照。

15) 『マノン・レスコー』、p.223。

いう無垢な性質とが矛盾的に同居している。マルグリットもマノンと同様に、クルチザンヌらしからぬ無邪気さ、天真爛漫さがあり、そこには「無垢な不道德」があると描写されている。アルマンは、彼女の容姿に対して「情熱的な天性」「芳醇な香り」「情欲のきらめき」という官能的な部分と同時に「天啓のようなもの」と純潔的要素も見出している。その上でマルグリットに「ちょっとしたことで娼婦になってしまった処女」と「ちょっとしたことで愛情深く純粋な処女に戻ってしまう娼婦」という二面性を見出している¹⁶⁾。語り手の記述にも「あれだけ頹廢的な暮らしをしていたというのに、なぜあんなふうに処女のような、子供のような顔つきをしていたのだろう¹⁷⁾」と示されていることから、彼女にも不道德と無垢という矛盾した性質が存在する。このような性質によって、彼女らは存在と見かけの乖離を生じさせ、その曖昧さこそが男性を魅了する要因であると考える。

上記のように、両作品は語りの構造から物語の筋書きまで、共通している部分が多数存在する。なぜこれほどまでに『マノン・レスコー』に類似させる必要があったのか。まず、あらゆる部分で『マノン・レスコー』を用いることは、『椿姫』の物語情景や登場人物の性質を必然的に読者に植え付けさせる効果がある。また様々な共通点を設けることで、相違点も同様に明確となり、読者に比較を促すことが可能になる。つまり、相違の焦点となる物語後半部分におけるマルグリットとマノンの比較を通して、マノンには無い、マルグリットに見出された理想のクルチザンヌ像を強調させるためだと考えられる。さらに、両者が持つ「二面性」という性質はマリにも見出されたもので、山田勝（1994）はマリの「“聖

16) 『椿姫』、p.135-136.

17) 同書、p.24.

と俗”“大人っぽさと子どもっぽさ”は、ドゥミモンデーヌ¹⁸⁾としては特異なもの」と言及している¹⁹⁾。つまりデュマ・フィスは、こうしたクルチザンヌとの恋愛というテーマのもとで、多くの男性読者にとって「永遠の女²⁰⁾」であり「美と愛の象徴²¹⁾」とされているマノンを用いることで、それに匹敵するマルグリット（やマリまでも）の価値を示そうとしたのだろう。『マノン・レスコー』は良くも悪くも、『椿姫』との相違を容易に印象づけられる便利なツールなのだ。

3. 『マノン・レスコー』の役割

前章では両作品における類似点について具体的に述べ、『マノン・レスコー』の使用意図を明らかにした。では、『マノン・レスコー』は『椿姫』でどのように用いられ、作品全体に与える影響や役割とは具体的にどのようなものなのか。本章では、物語に沿って『椿姫』の中で記述されている『マノン・レスコー』についてたどった上で、相違点にも触れながら、その役割について考察していく。以下からは『マノン・レスコー』が記述されている主に2点の場面に焦点をあて、その本質を論じていきたい。

3-1 クルチザンヌとの恋愛と宿命

前章で述べたように、本書における物語の筋書き、特に前半部分は『マノン・レスコー』に似通っていると言える。『マノン・レスコー』の前半では、デ・グリュはマノンと駆け落ちをして幸福な生活を送っていたが、徴税請負人B氏の金銭的誘惑によってマノンに裏切られてしまう。『椿

18) フランス語で高級娼婦を意味する。『ディコ仏和辞典』、白水社、2002年参照。

19) 『ドゥミモンディーヌ パリ・裏社交界の女たち』、山田勝著、ハヤカワ文庫、1994年、p.84。

20) 同書、p.98。

21) 『娼婦の肖像』、村田京子著、新評論、2006年、p.34。

姫』において同様な場面にあたるのは、アルマンがマルグリットと一夜を過ごし幸福に浸っていたが、パトロンである G 伯が現れたことで彼女に冷淡な態度で遇われてしまう場面である。しかし、それは裏切りではなく、マノンがデ・グリユとの生活費を稼ぐためであると同様に、アルマンとの田舎暮らしの資金繰りのための行為である。この場面の中で、そのことをまだ知らないアルマンとマルグリットとの対話があり、そこで『マノン・レスコー』が記述されている。

マルグリット「私が何を考えているか、わかる？」

アルマン「いや」

マルグリット「計画を思いついたの」

[…]

アルマン「実行するのも一人でやるつもり？」

マルグリット「ええ、面倒は私が一人で背負うわ」

そう言った時のマルグリットの微笑みを僕は生涯、忘れることはないでしょう。彼女はさらにこう付け加えました。

マルグリット「でも、利益は二人のものよ」

利益と聞いて、僕は我知らず顔を赤らめました。B 氏から金をまきあげ、デ・グリユと一緒に使ってしまったマノン・レスコーを思い浮かべたのです²²⁾。

マノンについて言及されることにより、マルグリットとマノンの相関関係が読者に印象づけられると共に、アルマンの運命が予告されているとも考えられる。これまでアルマンは堅実で慎ましい人生を歩んでいた。そんなアルマンは、デ・グリユのような男としてのプライドを捨てたような生き方をするに、この時はまだ恥じらいがあったため、少ばかり怒りを露わにして反論する。しかし、この描写こそ、アルマンがマ

22) 『椿姫』、p.211-212.

ルグリットをマノンに重ね合わせていることを示し、マルグリットのようなクルチザンヌとの恋愛において歩むべき宿命の啓示とも捉えられる。

ただ、アルマンに「マノン・レスコー」を彷彿とさせたのは、マルグリットによる「利益は二人のものよ」という言葉だけではないと考えられる。この場面は、マルグリットのクルチザンヌとしての特質が顕著に表れているアルマンの心情描写がある。

彼女はいつものように、暖炉の前で絨毯に腰を下ろし、悲しそうな顔で暖炉の炎を見つめていました。何か思いつめています。何を考えているのでしょうか。僕にはわかりませんでした。僕はただ愛情を込めて、見つめていました。今後の苦しみを想像して怖くなる気持ちもありました²³⁾。

このように、アルマンにとってマルグリットの本心は「不透明」で謎めいている。また『マノン・レスコー』においても、マノンの涙をみたデ・グリユが「愛情によるものか、それとも憐れみによるものか、私には見わけられません²⁴⁾」と言及している。マノンもまたデ・グリユにとって「不透明な心」の持ち主である。マノンの場合は特にそれが顕著である。『椿姫』では、(最後の日記のみではあるが)マルグリット自身の口で意思・意見が直接語られている。一方で『マノン・レスコー』は、マノンが自身で直接それを言及することはなく、全てデ・グリユを通して語られている。つまり、私たち読者はデ・グリユの目から見た「マノン像」しか知ることができない。したがって、マノンは「その抽象性、曖昧さ、変幻自在さによって、様々なイメージで捉えられ、そこから多様な女性像が作り出されてきた²⁵⁾」とされている。

23) 同書、p.211.

24) 『マノン・レスコー』、p.42.

25) 『娼婦の肖像』、村田京子著、新評論、2006年、p.58.

では、マルグリットに「マノン像」を見出したアルマンは、マノンに対してどのような女性像を投影していたのだろうか。ここで、マルグリットの行為が裏切りではなく、自身のための行為であることに感銘を受けたアルマンが、彼女に贈った『マノン・レスコー』に付けた献辞について着目する。以下はその献辞である。

「マノンをマルグリットに贈る。その慎み深さに アルマン・デュヴァル²⁶⁾」

ここに書きこまれた言葉の意味やアルマンの真意はどのようなものか。この献辞の真意について、村田京子（2006）は以下のように指摘している。

デ・グリユーがすべてを捨てて献身的にマノンに尽くしたように、マルグリットに絶対的な服従を誓うアルマンの「恭順の念」が、この言葉によって表されている。アルマンは、自らをデ・グリユーの立場に重ね合わせているのだ。同時に彼は、それまでの慎ましい生活を一変させる。マルグリットの気まぐれを満足させ、贅沢な暮らしを維持するために、デ・グリユーのようないかさまではないにしろ、賭博まで手を出すようになる²⁷⁾。

アルマンは自身とデ・グリユーを重ね合わせており、彼がマノンにしたように、マルグリットとの愛だけに生きることを決意している。つまり、この献辞の真意とは、彼女への「絶対的服従」「永遠の愛」である。そして実際に、アルマンはデ・グリユーと同じ運命を歩んでしまうのだ。まさに「恭順の念」がこの献辞に表れていると言えるだろう。

26) 『椿姫』、p.37.

27) 『娼婦の肖像』、村田京子著、新評論、2006年、p.66.

しかし、これが献辞に込められたアルマンの本質的な真意なのだろうか。なぜアルマンはマルグリットにこの献辞を書き入れて『マノン・レスコー』を贈ったのか。それは、ただ単にマルグリットとマノンを、自身とデ・グリュを重ね合わせたからではない。献辞の中の「その慎み深さに」という言葉について、本書で語り手である「私」が「マルグリットはマノンよりも、慎み深さが足りないと言いたいのか、それとも、マルグリットの慎み深さを讃えているのだろうか²⁸⁾」と述べていることから、少なくともアルマンはマノンに対して「慎ましさ」を見出していると考えられる。つまり、アルマンの真意が込められた「その慎み深さに」という言葉は、少し大げさに言うと、そんなマノンとは比にならない程のマルグリットの「慎ましさ」を表し、彼女が「崇高の対象」に値する存在であることを示唆しているのではないだろうか。また、ここにはデュマ・フィスの「理想像」が反映されているとも言えるだろう。これについては、第4章で詳しく論じることとする。したがって、上記の本文引用から、アルマンがマルグリットに「マノンの性質」を見出したものの、彼女をもはや別の超越した存在として捉えていることから、より慎ましい「マルグリット像」が強調されていると言える。そこではマルグリットとマノンの関係性をも巧みに印象づけられるだろう。

3-2 真実の愛

『椿姫』と『マノン・レスコー』の前半部分は先述したように共通点が多くみられるが、後半から結末にかけての展開は大きく異なる。『椿姫』の後半部分で、まず見られることとしては、マルグリットの心情変化である。アルマンと出会った頃のマルグリットは、若さと美貌を兼ね備えたクルチザンヌとしてパリ中に名を馳せていた。しかし、そんな彼女は男性から本当に愛されたことはなかった。このことは、彼女が「二ヶ月間寝込んだときだって、三週間もするともう誰も見舞いに来なくなっ

28) 『椿姫』、p.37-38.

た²⁹⁾」と自ら言及している場面から理解できる。そして彼女は、クルチザンヌである自身を一人の女性として愛してくれるアルマンに幸せを見出した。そして、彼女は生まれて初めて「真実の愛」を芽生えさせていくのだ。そうして彼女の心情は、アルマンとの田舎での生活における子供の頃を思い出すような自然との触れあいによって徐々に変化していく。その田舎での恋愛の中で、アルマンのマルグリットの変化に対する心情描写がある。

マルグリットは徐々に高級娼婦の面影を失っていきました。僕のそばに
 いるのは、若くて美しい娘。僕の愛する女性であり、僕を愛してく
 れているマルグリットという名の女性です。過去はすでに形を失い、未
 来は雲ひとつとない空のように明るい。太陽は貞節な花嫁を照らすよ
 うに、彼女に降り注いでいました³⁰⁾。

この田舎において、「貞節な花嫁」とあるように、マルグリットは完全に純潔な少女として存在し、まるでクルチザンヌである彼女が「処女」であるかのような大変容を遂げていることが見てとれる。また、彼女はいつものような豪華なドレスの装いではなく「白いドレスに大きな麦わら帽子」を身につけ「飾り気のない絹の外套を腕にかけた彼女」と描写されている³¹⁾。この「白」を身につけた彼女からは「無垢」「処女」「貞節」を象徴され、「麦わら帽子」からは「少女」を印象づけられる。それは、アルマンが「あのマルグリット・ゴージェだとは思わない³²⁾」と言及するほど、クルチザンヌの面影がまるで感じられない姿である。マルグリットも、自身の変貌を自覚しているかのような場面があり、そこで『マ

29) 同書、p.148.

30) 同書、p.265.

31) 同書、p.279.

32) 同書、同頁。

ノン・レスコー』について言及する描写がある。

この頃、マルグリットは時間を見つけては『マノン・レスコー』を読んでいた。一語ずつ真剣にたどりながら、この本を読んでいる彼女の姿を目にしたことも一度や二度ではありませんでした。そして、彼女はいつも、本当に相手を愛していたら、マノンのようなことはできるはずがないと言うのでした³³⁾。

アルマンと田舎に住み始めたマルグリットは「真実の愛」を見出したことによって純潔な存在として生まれ変わったため、マノンのデ・グリュに対する裏切り、即ちクルチザンヌの「不実な恋愛」を批判している。これは同時に、今までの自身を完全に否定しているどころか、恰も一切の穢れのない「処女」であるかのように、自身の「愛」を正当化していると考えられる。『マノン・レスコー』での「愛はしばしば奇跡を生み出す³⁴⁾」というデ・グリュの言葉にあるように、マルグリットが生まれ変わったことは「奇跡」である。それはやつのことで掴んだ幸せ、アルマンとの愛という彼女にとって何事にも代えがたい「唯一無二の力」によるものなのだ。そして、「マルグリットはもう僕なしでは生きられなくなっていました³⁵⁾」とアルマンが言うように、彼女にはその「愛」さえあればそれ以外は望まないのだ。

また、この場面においては、マノンとマルグリットの相違がはじめて表立っていると言えるだろう。加賀山孝子（1991）は、このマルグリットの台詞において「端的に言えばマノンは根っからの娼婦であり、マルグリットはそうではない」ことが理解できると両者の相違について指摘

33) 同書、p.202.

34) 『マノン・レスコー』、p.28.

35) 『椿姫』、p.274.

する³⁶⁾。確かに、この物語後半部分からは『椿姫』と『マノン・レスコー』は似ても似つかない程に相違しているとも言える。中でも、両ヒロインの「死」に関する描写、マルグリットの行動や彼女の真意が込められた日記の描写などが顕著である。また、少なくともデュマ・フィスはマノンには無い「ヒロイン像」をマルグリットに見出したことは確かである。しかし、加賀山が指摘するように「マノンは根っからの娼婦」であり「マルグリットはそうではない」というのは、果たしてどうだろうか。

結論から言うと、マノンもマルグリットも「娼婦」という事実は揺るがないが、互いに「根っからの娼婦」であるとは一概に言えないだろう。なぜなら、第1章で述べたように、両者には「娼婦の身体」と「無垢な心」という共通する特性がある。このことが、両者共に「根っからの娼婦」ではないという証明であると考えられるだろう。「娼婦たちは身体を売ることによって魂を消耗し、官能によって心を灼きつくし、放埒な生活でうぶな心は失われている³⁷⁾」とデュマ・フィスが言うように、「根っからの娼婦」は「無垢な心」など持ち合わせているはずがないのだ。その上で、マノンよりもマルグリットの方が「愛」に対して憧れていたため、その効力が著しく発揮されたのだろう。その背景は、アルマンが「彼女は誠実な愛に癒やしを求めていた³⁸⁾」と言及していること、貧困や母からの虐待による幸福とはかけ離れた幼少期を過ごしたこと³⁹⁾から理解できるだろう。彼女はただ無条件に自分自身を愛してくれることを心の底から願っていたのだ。そのため、マルグリットの「娼婦的側面」よりも「少女的側面」が際立っているのだろう。つまり、ここではヒロインに及ぼす「愛の力」が大いに描かれ、それが不貞をも清める「高潔なもの」として存在していると言える。マルグリット自身もこの愛のために献身的に生

36) 「デュマ・フィス作『椿姫』のヒロイン像」、加賀山孝子著、p.22.

37) 『椿姫』、p.190.

38) 同書、p.231.

39) 同書参照。

きることで、これまでの不貞が赦されるものとして自負している。

デュマ・フィスは、ここで『マノン・レスコー』を描写することで、真実の愛によって生まれ変わったマルグリットの「純潔」「献身」「愛情」を強調する同時に、マノンよりも遙かに高潔な「愛」を示したかったのだろう。これによって、マルグリットはマノンとは異なるクルチザンヌ、つまり新たな「ヒロイン像」として顕在化されたのだ。

4. マルグリット・ゴーチエの美化 —— 聖女的側面 ——

前章で述べてきたように『マノン・レスコー』は、前半部分ではマルグリットとアルマンの運命を導く、または人物像を裏付ける役割を担い、後半部分からは生まれ変わったマルグリットの純潔、慎ましさを愛の高潔さを表す役割を担っていると考えられる。つまり、デュマ・フィスは、マノンを幾度も作中に取り上げることによって、彼女以上の「愛」「純潔」「献身」を見出し、より卓越した「ヒロイン像」を創り出そうと考えたのだろう。では、デュマ・フィスが見出した「マルグリット像」とは具体的にどのようなものか、マルグリットは最終的にどのような存在となったのか。本章では、マルグリットの「自己犠牲」について取り上げ、その行動にある背景や彼女の真意について論じた後、ブルジョワ社会においてデュマ・フィスが思い描いた理想の「ヒロイン像」を明らかにし、その本質を追究していく。

4-1 愛と自己犠牲

『マノン・レスコー』とは全く別の展開をみせる『椿姫』の後半部分においては、マルグリットの「自己犠牲」が主軸として存在し、それは読者に憐憫の情を抱かせる。『椿姫』の醍醐味とも言えるだろう。また、マノンと明らかに相違するマルグリットの行動でもある。なぜ彼女はそのような行動をしたのか。正確に言うと、せざるを得なかったのだろうか。これには、アルマンの父の存在が大きく関係する。この父の介入、説得によってマルグリットは身を引く決意をするのだ。しかしながら、『椿

姫』では、その「自己犠牲」の理由がはっきり明示されていないように感じる。以下から、父の存在や役割を明らかにし、マルグリットの「自己犠牲」に及ぼす影響、そこにある時代背景を解明していく。そして、マルグリットが自己を犠牲にした理由を明確にしていきたい。

4-1-1 父の存在

前章にあるように、真実の愛に目覚めたマルグリットは、その後のアルマンとの幸せな生活を夢見るようになる。アルマンにとっても、クルチザンヌとしてのマルグリットの姿は無く、純粋な婚約者として描写されている。しかし、この夢のような幸福はアルマンの父によって剥奪されてしまう。それは、マルグリットとの生活のためにアルマンが母親から相続した財産に手を付ける決意をしたことによるものである。『椿姫』の舞台である七月王政期・ナポレオン法典下では「資産の維持・継承を目的として、夫＝父による妻・子に対する支配＝服従」を法として確立し、「子の婚姻と行状に関しても、法典は父に強大な監督権限を付与している」ため、堅実なブルジョワ階級に属するアルマンの父は、彼らの反道徳的な恋愛・結婚による侵害から家の名誉、財産を死守し、またそれらを阻止する義務があるのだ⁴⁰⁾。このような父のブルジョワ的価値観はマルグリットとの対話において顕著に表れている。以下は、その場面の一部である。

息子には財産がありません。それなのに、母から相続した権利まであなたのために差し出そうとしている。[…] 世間はまさかあなたがこれほどの方とは知りませんから、あなたに犠牲を払わせたことで、息子は恥知らずだと思われ、我が家はあってはならない汚名を背負うのです。[…] あいつはすでに賭博に手を出しました。ええ、知ってい

40) 『19世紀パリ社会史——労働・家族・文化——』、赤司道和著、北海道大学図書刊行会、2004年、p.100-101.

ますとも。そしてそれをあなたには内緒にしていたこともね。だが、ふと冷静さを失ったその瞬間、アルマンは、これまで何年もかかって私が積み上げてきた資産の一部まで失っていたかもしれないんです。[…]
そして、一度起こりかけたことはこれからだって起こりかねないのです⁴¹⁾。

さらに、父はマルグリットを「マノン・レスコーのような女⁴²⁾」と言及しており、アルマンをデ・グリユと重ね合わせ、彼とマノンのような「悲劇的結末」になることを懸念している。

七月王政期のブルジョワ社会では、保守的な道徳が重んじられていたため、娼婦は「悪徳」とされ、あくまでも裏社会に留まることによって容認されていた。そのため、そんな娼婦がブルジョワの青年と結婚すること、表社会で生きていくことは、「家族」「社会秩序」を崩壊させるもっともな脅威とされた。19世紀パリにおける売春を研究した衛生学者であるアレクサンドル・パラン＝デュシャトレ（1992）は、娼婦に対して「下水渠や道路やごみ捨て場に対するのと同じ」でなければならないとし、「能うる限りその存在を人目につかないようにしておくこと」が我々に課せられた義務であると述べ、こうしたブルジョワ的思想を反映させている⁴³⁾。アルマンの父はまさにこういった思想の体现者であると言える。そんな父はここで、アルマンの妹を「天使のように無垢な娘⁴⁴⁾」と言及することで、クルチザンヌであるマルグリットと対極化させている。貞節を重んじるブルジョワ道徳では、このように「処女」と「娼婦」の対立が色濃く表され、前者は「美德」、後者は「悪徳」と著しく二分化されて

41) 『椿姫』、p.394-396.

42) 同書、p.313.

43) 『十九世紀パリの売春』、アレクサンドル・パラン＝デュシャトレ著、アラン・コルバン編、小杉隆芳訳、法政大学出版局、1992年、p.165.

44) 『椿姫』、p.398.

いた⁴⁵⁾。この点は、性に対して寛容的であった18世紀に執筆された『マノン・レスコー』には見られない事象の1つであると言えるだろう。その上で、父は不実な女がいくら純愛に目覚めたとしても、「純真無垢な感情は真に純潔な女にしかないもの⁴⁶⁾」と言及している。したがって、娼婦は生きながら不貞の罪を償い、一人の女性として真の恋愛をすることは認められない。アルマンの父は、こうしたブルジョワ道德の侵害を防ぐ制裁者として存在し、娼婦から家の名誉を守り、アルマンを現実社会に復帰させる「ブルジョワの父」であると理解できるだろう。つまり、父は義務として、どんな手を使ってでも2人を離別させなければならないのだ。

4-1-2 自己犠牲の真意

マルグリットの自己犠牲の背景において、アルマンの父の影響力は計りしれない。ブルジョワ道德の体現者である父は、世間知らずで「恋は盲目」な状態の息子への説得よりも、「罪深い女」の弱みにつけ込むような、家族、アルマンの将来、現実社会、反道德的恋愛の危険性を引き合いにする内面的説得を試みる。そして最後に「その愛の証を示すとしたら…あなたの愛を犠牲にし、彼の未来を守ることです⁴⁷⁾」と懇願している。さらに追い打ちをかけるように娘の結婚についてまで触れ、2人の恋によって「罪のない娘」の幸福が奪われると訴えかけている。そして、彼女は反論することもなく、ただ涙を流しながら別れを承諾するのだ。

一方でアルマンは、このことをなにも知らされず、突如姿を消したマルグリットに裏切られたと取り乱す。以下は、その様子が描写されている場面の引用文である。

45) 『娼婦の肖像』、村田京子著、新評論、2006年参照。

46) 『椿姫』、p.226.

47) 同書、p.397.

ふと見ると、テーブルの上に『マノン・レスコー』が開きっぱなしになっていました。ところどころ、濡れたあとがあります。涙かもしれません。ばらばらと頁をめくったあと、僕は本を閉じました。不安という名のヴェール越しに頁を眺めても、文字がまるで頭に入ってこなかったのです⁴⁸⁾。

ここで『マノン・レスコー』を描写することで、両作品における結末の相違が示唆されていると考えられる。同じクルチザンヌであったとしても、死の間際でもデ・グリユの愛に包まれ、彼の腕の中で息を引き取るマノンのような結末は、彼女には決してあり得ないのだ。つまり、この本を濡らした涙は、何よりも大切なアルマンとの愛溢れた幸福を断ち切ることの哀情によるものである。またそれは、アルマンへの愛を貫くための「自己犠牲」を決心したことの表れとも考えられるだろう。アルマンの父が述べているように、ブルジョワ社会のもとでは、不貞は真実の愛によっても赦されず、「罪な女」がその愛を証明するためには、自己を犠牲にする他はないのだ。つまり、マルグリットは自ら身を引くことで、アルマンに対する愛、アルマンの人生、その家族を守ろうとしたのだろう。そうして、自身が侵した罪の赦しを得ようとしているのだ。しかし、ひどく動揺するアルマンがこの涙の意味に気づかない。いやむしろ、決して気づかれてはならないのだ。アルマンが涙の意味を知れば、マルグリットの決意が無駄になってしまう。つまり、彼女の「改心」やアルマンを愛することの「赦免」の機会が奪われてしまうのだ。そのあつてはならないことのため、マルグリットはアルマンにどうしても真実を隠蔽しなければならなかった。だが、悲しみによる涙を『マノン・レスコー』に残してしまう。この涙に濡れた『マノン・レスコー』こそ、アルマンが真実を知ることができた唯一の手段なのだ。ここでは、アルマンただ1人が非現実的世界に取り残されている社会の未熟者と言えるだろう。

48) 同書、p.340-341.

マルグリットが自己犠牲を決意した理由として、高潔な愛を示すため、なによりアルマンのためであり、その上で自身の贖罪のためであると述べてきた。一方で、マルグリットの自己犠牲の本質的な理由として、ロラン・バルト（1967）は「愛」ではなく「認識欲求」と対照的な指摘をしている。以下は、彼の著書『神話作用』の中での『椿姫』に対する指摘を一部抜粋したものである。

「椿姫」の中心的神話は、恋愛ではなく認識である。マルグリットは認識してもらうために愛しているのだ。[...] マルグリットはまず、アルマンによって認められたと感じて、感動した。そしてそれ以後彼女にとって情熱とはこの認識への恒久的な懇願に外ならない。デュヴァル氏に対して承知した、アルマンを諦めるという犠牲が、何ら道徳的なものでないのは、それ故である⁴⁹⁾。

このように、マルグリットが自己犠牲を決意したのは、ブルジョワ社会に「認められたい」ためであるとロラン・バルトは指摘する。さらに彼女は、恋愛小説である『椿姫』の本質が「恋愛ではなく認識」であり、彼女にとっての情熱は「認識への懇願」であるとも言及している。これはつまり、ブルジョワと対極的なマルグリットが「ブルジョワ的恋愛⁵⁰⁾」を表明しているアルマンに「認められた」と感銘し、そして次にブルジョワ社会、アルマンの父に「認められたい」と感じるようになったということである。そして、彼女は自己を犠牲にすることで、アルマンや彼の父からも「尊敬の念⁵¹⁾」を得られると本書で言及している。つまり、ブルジョワ社会の象徴である両者に「尊敬」されることは、ブルジョワ社会に「尊敬」されると意味づけられるのだ。これこそがロラン・バルトが

49) 『神話作用』、ロラン・バルト著、篠沢秀夫訳、現代思潮社、1967年、p.132-133.

50) 同書、p.132.

51) 『椿姫』、p.399.

指摘する「認識」である。

これを踏まえ、前述した理由が全て「認められる」ためであるとすれば、マルグリットが自己を犠牲にする真意に納得ができるだろう。実際、あれだけの事象で彼女が素直に自己犠牲を決意したとは理解しがたい部分もある。なぜなら、彼女はブルジョワ社会の人間ではないため、アルマンの父の道徳的な説得に対しても反論の余地があり、それに殉ずる必要性がないからだ。彼女には、アルマンとの幸福、愛さえあればそれで良かったはずなのだ。この点からすると、ロラン・バルトが指摘するように、自己犠牲の要因として、ブルジョワ社会に「支配される」のではなく「認められる」ため、そういった「自己欲求」を満たすためという事象は一理あるとも言えるだろう。

しかし、それは自己犠牲の本質的な要因なのだろうか。それはデュマ・フィスが意図した「マルグリット像」なのだろうか。再度述べるが、幸福とはかけ離れた辛い幼少期を過ごした彼女は愛に飢え、憧れていた。そんな彼女はやっと手に入れた幸福であるアルマンとの愛を他の何よりも大切にしていた。つまり、彼女にとって、この愛を手放すということは、この上なく辛く悲しいことであり、生き甲斐を失うも同然のことなのだ。実際、自己を犠牲にすることを決心した彼女が、その後にアルマンと会ったとたんに鳴咽するほどに激しく泣きじゃくるのである⁵²⁾。このことから、ロラン・バルトが指摘するような、マルグリットの行動全てが「認められたい」からという道徳的感情、或いは野心によるものとは到底考えられないだろう。さらに、マルグリットはアルマンとの恋が「ありきたりの恋じゃない⁵³⁾」と言及していることから、自身が社会から排除された存在であると自覚している。そのため、彼女はアルマンの父の説得を通して「尊い感情」を思いだし、ブルジョワ道徳を自らの内面に見出していくのだ。マルグリットは「ありきたりじゃない愛」をなんとかし

52) 同書、p.325参照。

53) 同書、p.284。

でも守りたいがため、アルマンの父にこの愛を認めてもらいたかった。したがって、彼女は愛のために愛を諦めることで、アルマンの父から敬意を示され、自身も清らかな誇りを呼び起こしたのだ⁵⁴⁾。この愛による自己犠牲は、マルグリットをより高潔で聖的な存在として確立させていくのだ。

4-2 理想のクルチザンヌ像

前章で述べたように、愛のために自己を犠牲にしたマルグリットは、もはやただのクルチザンヌでも純粹無垢な少女でもなくなっていく。では、彼女はどのような存在となるのだろうか。それを明らかにするため、自己犠牲の末に訪れたマルグリットの「死」について焦点を当てる。愛のために自ら身を引いたマルグリットは、アルマンに黙ってパリへと戻り、クルチザンヌとしての生活に復帰する。無知のアルマンは、あれ程に過去の自分を悔いていた彼女が、自分を裏切って娼婦業に戻ったとは到底考えられず、ひどい錯乱状態に陥る。程なくして、彼女の病状が悪化していき、アルマンがそれを知った頃には既にマルグリットは死の床についていた。そして、彼女は寝室で永遠の愛を誓いながら一人孤独に死を迎える。

このマルグリットの「死」について、『椿姫』の語り手である「私」がマノンとマルグリットの「死」を比較している。以下はその部分の引用である。

マノンは砂漠で死を迎える。だが、結局、彼女は自分の全身全霊をかけて愛してくれた男の腕のなかで死んだのだ。男は、彼女が息絶えると墓を掘り、涙で彼女の遺骸を濡らし、自分の心まで一緒に葬ってしまった。マルグリットは、罪深き女であるという点、そしておそらく改悛していたという点では、マノンと同じだが、私が目にした限りで

54) 同書、p.399参照。

は、豪華な暮らしのさなか、華やかな過去を思わせる寝台で死を迎えたようだ。しかし、彼女はマノンが埋葬された砂漠よりも、さらに不毛で、だだっ広く、非情な心の砂漠のなかで死んだとも言える⁵⁵⁾。

確かに、マノンと比較すれば、マルグリットの「死」はより残酷な印象を与える。実際、アルマンはパリに戻ったマルグリットに対して、「羞恥心や情愛や知性をもたない高級娼婦⁵⁶⁾」であるオランプの愛人となって屈辱的な仕打ちをする。そしてマルグリットは、愛する男からの耐えがたい迫害によって病状を急速に悪化させるのだ。加えて、彼女が病魔に苦しんでいる最中に、借金返済のために家具を差し押さえて「執行官」の男たちが無慈悲な振る舞いで部屋に押し入る。家具が全て差し押さえられたその部屋こそ「不毛で、だだっ広く、非情な心の砂漠」である。マルグリットは、この部屋の中で「どんな殉教者であれ、これほどまでの拷問に耐えた者はいない⁵⁷⁾」とされる程の過酷な「死」を迎えるのだ。つまり、ただマルグリット1人が茨の道を歩んだのである。一方で『マノン・レスコー』では、マルグリットのような残酷な「死」は描写されていない。むしろ、マノンの「死」についてもそれほど深く言及されていないのだ。つまり『マノン・レスコー』では、デ・グリユの「絶対的な服従」「宿命的な愛」が主軸として描写されている。これに対して『椿姫』では、不実な女の「自己犠牲」「死」という悲劇的テーマに重点を置いていると言えるだろう。

また、デュマ・フィスは意図的にマルグリットを残酷な「死」に追いやるように仕向けたと考えられる。それは、彼女に「キリスト教徒としての死」を迎えさせるためであろう。実際に、苦難の末に瀕死の状態となったマルグリットに対して「この方は、罪深き人生を送られたようで

55) 同書、p.38-39.

56) 同書、p.386.

57) 同書、p.427.

すが、敬虔な信者として死をお迎えになることでしょ⁵⁸⁾」と神父が述べている。つまり、彼女を「殉教者」として描写することで、その「聖的な死」を強調させるためと言える。「罪深い女」が過去の罪を償うためには過酷な道を歩む他なく、その末に死ぬことで始めて社会に認められるのだ。言わば、マルグリットは死ぬことで、崇高に値する「聖女」として存在するのだ。こうしたことは、マルグリットのモデルであるマリとは相違している。このマルグリットの美化はデュマ・フィスの倫理観によるものと言えるだろう。デュマ・フィスが過ごしたのは「革命で否定されたはずの王政が復活した」時代であり、「ブルジョワ文化が繁栄する一方、啓蒙思想への反発、宗教的道德観への回帰が見られた」時代でもあった⁵⁹⁾。したがって、いかに彼がブルジョワの価値観や信仰心を持っていることが理解できるだろう。そんな彼は七月王政期のブルジョワ社会において、クルチザンヌとの恋愛というテーマで小説を書く上、娼婦による社会秩序の侵害をただ黙って見逃すはずがないのだ。そのため、罪深いヒロインを信仰の道に導くことで「更正」させている。そして、愛のためにブルジョワ社会を尊重して自己犠牲の末に死ぬという一連の流れをもって「聖マルグリット」として成立させているのだ。このことについて、『椿姫』の語り手である「私」が本書の最後で以下のように述べている。

私はこの話をもって、どんな娼婦でも、マルグリットのようなこと、彼女がなしたような献身が可能だと言うつもりはない。そんな考えは毛頭ないが、それでもあまたいる娼婦のなかに、このような真剣な愛に生き、その愛ゆえに苦しみ、死んでいった女がいたということを、私は知っている。[…] 悪徳を礼賛するつもりはない。だが、気高い人たちが苦しみの中にあっても、祈り続けている声が、そこから聞こ

58) 同書、p.426.

59) 同書、p.446.

えてくる以上、私はこだまとなってその声を伝えたいのだ。もういちど言う。マルグリットの話は例外的なものだ。だが、それがあふれた物語だったら、わざわざこうして書き残す必要もないだろう⁶⁰⁾。

つまり、デュマ・フィスはマルグリットをクルチザンヌの在るべき姿として描写することで、自身の理想像を反映させていると考えられる。ここにきて第2章で述べた「献辞」の本質的な意味がより確信できるだろう。デュマ・フィスは、マルグリットのこの上ない心情の優越性を褒め称えているのだ。それと同時に、このマルグリットの前では、マノンも劣る存在、軽蔑にも値する存在とも考えられる。つまりそれは、マノンとマルグリットがいかに乖離したクルチザンヌであることの証と言えよう。したがって、デュマ・フィスはマノンには無いような「献身」や「改心」をマルグリットに見出し、ブルジョワ社会において相応しいクルチザンヌを作り上げたと共に、自身の理想的な「ヒロイン像」を生み出したのではないだろうか。

5. おわりに

これまで『椿姫』における「ヒロイン像」を明確にするために『マノン・レスコー』との対比を通して考察してきた。『マノン・レスコー』によって、マノンには内在しない「愛」「純潔」「献身」「改心」を最終的に見出したマルグリットは、より聖的な存在として強調されるのだ。ここで1つ断っておきたいことは、『マノン・レスコー』と『椿姫』では、舞台の時代が相違しているということである。前者は18世紀に執筆されたものであり、後者は19世紀のものである。この時代の相違によって、社会や道徳、文化までもが別物となる。そのため『椿姫』において、マノンよりもマルグリットの方が「慎ましい」存在として描写されることはより自然であるだろう。ただ、マルグリットの偉大さを最大限に際立た

60) 同書、p.433.

せるものとして、「永遠の女」であるマノンが拔擢されたのだ。つまり、マルグリットのブルジョワ的価値観を反映させた性質は、マノンの存在によってより一層具体性を帯びるのだ。これを踏まえると、19世紀のブルジョワ社会が舞台である『椿姫』において、クルチザンヌがヒロインであるにも関わらず、当時では一世を風靡する程の人気があったことは容易に理解できるだろう。ブルジョワ道徳と対極的なマルグリットが愛のために自らを犠牲にする姿は、当時の読者に憐憫の情を抱かせるには十分な要素である。つまり、マルグリットは、高潔な「死」によって完全に浄化され、聖女性をも帯びたヒロインとして社会に受け入れられたのだ。またそのような性質は、マルグリットのモデルであるマリにも該当しない。このことから、いかにマルグリットがデュマ・フィスによって美化された女性であるか、容易に理解できるだろう。マルグリットこそ、デュマ・フィスが思い描いたこの上なく理想的な「ヒロイン像」であるのだ。

(本学卒業生)

参考文献

- 『神話作用』 ロラン・バルト著 篠沢秀夫訳 現代思潮社 1967年
『学苑』 「デュマ・フィス作『椿姫』のヒロイン像」 加賀山孝子著 昭和女子大学光葉 619号 1991年
『十九世紀パリの売春』 アレクサンドル・パラン＝デュシャトレ著 アラン・コルバン編 小杉隆芳訳 法政大学出版局 1992年
『ドゥミモンディエス パリ・裏社交界の女たち』 山田勝著 ハヤカワ文庫 1994年
『啓蒙精神と弁証法的思惟』 ルシアン＝ゴルドマン著 永井健晴訳 文化書房博文社 2000年
『悪女入門 ファム・ファタル恋愛論』 鹿島茂著 講談社 2003年
『仏文研究』 「『椿姫』におけるクルチザンヌ像：マルグリット・ゴーチエとマノン・レスコー」 村田京子著 京都大学フランス語学フランス文学研究室 34号 2003年
『19世紀パリ社会史——労働・家族・文化——』 赤司道和著 北海道大学図書刊行会 2004年
『娼婦の肖像 ロマン主義的クルチザンヌの系譜』 村田京子著 新評論 2006年

『椿姫』デュマ・フィス著 吉村正一郎訳 岩波文庫 2007年

『マノン・レスコー』プレヴォ著 河盛好蔵訳 岩波文庫 2007年

『象牙色の賢者』佐藤賢一著 文藝春秋社 2010年

『オペラになった高級娼婦』永竹由幸著 水曜社 2012年

『言語と文化』「歴史的, 社会的, 文学的ファム・ファタル像の変遷: 読者志向性・作者・『マノン・レスコー』」日中鎮朗著 法政大学言語・文化センター 2017年

『椿姫』デュマ・フィス著 永田千奈訳 光文社文庫 2017年

『マノン・レスコー』プレヴォ著 野崎歓訳 光文社文庫 2018年